SDGs理解の裾野を広げる日常的な授業レベルにおける実践

山口県立下関南高等学校　蒼下和敬・宇野善郎

1　はじめに

全国地理教育研究会（富山大会、2019年８月）では、筆者の一人が前任校（山口県立響高等学校）において試みた、SDGsを用いた学校全体のカリキュラム・マネジメントに関する実践について研究発表を行った（内容の概要については本誌『地理の広場』の前号（140号）に掲載されているのでご参照いただきたい）。研究発表の後に「どのような学校でも取り入れられるSDGsの方法はどのようなものが考えられるか」という質問を多数いただいた。そこで本稿では、山口県立下関南高等学校において蒼下・宇野（以下、「筆者ら」とする）が担当する地理Ａにおいて単元レベルで取り組んだSDGsを通した探求(究)的な学習活動の試みを例として紹介することにより、質問に対する回答とさせていただきたい。

2　現勤校における諸課題を探求(究)する学習の検討

筆者らが勤務する山口県立下関南高等学校は、全日制普通科（35人×４学級）であり、生徒の大半が大学入試センター試験等の学力試験を利用した進学をめざしている。生徒は板書を丁寧にノートに記録するなど授業に真摯に向き合っているが、課題を見つけてグループでまとめたり、自分の意見を論理的に表現したりすることには慣れていない者も多い。

筆者のうち蒼下は、現勤校においても諸課題を探求(究)する力を身に付けさせることをめざして、地理ＡにおいてSDGsを用いた諸課題学習を「現代世界の諸課題」の単元で実施しようと計画した。2018年公示の学習指導要領では、持続可能な社会・地域づくりに向けて諸課題を探究する学びが強調され、特に地理（地理総合・地理探究ともに）では、「国際連合における持続可能な開発のための取組などを参考」にした教育活動を展開するよう求めている。また、同年に示された学習指導要領解説（地理歴史編）では、その好例として「国際連合が定めた持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals；SDGs）」を挙げている。

また、筆者のうち宇野は、現勤校が推進校指定を受けた県事業「『やまぐちっ子の心を育む道徳教育』プロジェクト」の担当者（道徳教育推進教師）として、SDGsが公民科の公共や政治・経済（この他、家庭科にもある）でも例示されてい

ることに着目した。同学習指導要領総則(第７款)では、道徳教育に関する配慮事項として、「公民科の『公共』及び『倫理』並びに特別活動が（中略）中核的な指導の場面であることに配慮すること」「指導の方針や重点を明らかにして、各教科・科目等との関係を明らかにすること」とある。宇野は、SDGsを公民科のみならず地理においても取り扱うことによって、諸課題学習を軸としたカリキュラムマネジメントの視点が強化され、道徳教育も充実させることができると考えた。

以上のことから、筆者２名が担当する地理Ａの「現代世界の諸課題」単元において、SDGsを通した探求(究)的な学習に試行的に取り組むことにした。響高校では、学校全体が取り組む探求(究)活動であったが、下関南高校では、教科の単元レベルから取り組むことによって次第にその広がりを試みようとするものであり、位置づけに違いがある。

3　取組の実際

授業では、「現代世界の諸課題」単元を二部に分け、前半において人口問題や食料問題、都市・居住問題などの地球的課題を各講座７～９班（講座の規模に開きがあるため数が異なるが、１班あたり４人を基本とした）に分かれて調べ、ポスターにまとめて発表する形式をとった（調べ学習３時間、発表２時間、その他放課後などに自主活動をして学習・製作時間を確保することとした）。

後半では、前半で学習した内容や、生徒が下関南高校に入学してからこれまでに学んだり経験してきた内容とSDGsを結びつける学習活動を行った。響高校ではSDGsシールを作成して取組の媒介物としたが、下関南高校では時間的な制約もあり、図１のようなカードを用いた学習活動をすることとなった。実際の展開は、以下の生徒配布資料（Ａ３サイズ）に基づいて進められた。

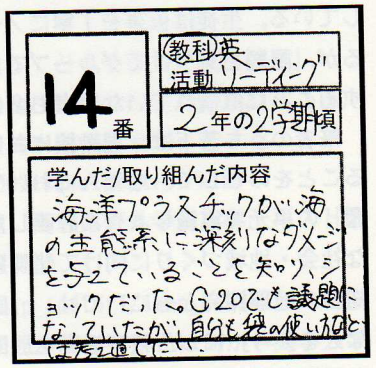


図１　SDGs 活動で用いたカード

■地理Ａから現代社会の様々な課題を見つめる

ＳＤＧｓを学ぼう

①今世界中で注目されているＳＤＧｓ。もちろん模試や入試にも！

たとえば、「現代社会」の資料集p. 288を見てください。カラフルな17のタイルに、番号とイラストが描かれています。今、この17のタイルを用いた社会的な取り組みが世界中で注目されています。もちろん、大学入試や模擬試験でも出題が急増しています。ＳＤＧｓは、入試だけでなく、進学・就職先でも必須の知識となることは間違いありません。今のうちに、しっかりと実感をもって学んでおきたいと思います。

②ＳＤＧｓとは何ですか。

ＳＤＧｓは、Sustainable Development Goalsの略で、日本語では「持続可能な開発目標」といいます。2015年の国際連合の総会で、全会一致で採択された「世界の目標」です。

ＳＤＧｓでは、個人や地域の問題から世界中に広がる問題までを、17のカテゴリーに分け、2030年までの解決や改善をめざして、国・企業・ＮＧＯや個人の垣根なく、総掛かりで取り組もうとするものです。17のテーマは下のようなものがあります。

国連広報センターサイトより）

②壮大な目標のようですが…

ＳＤＧｓのキーワードは「だれ一人取り残さない」。すごく高い目標です。だからといって一人一人が始めない限り、絶対に解決できないでしょう。まずは、私たちができそうな（学べそうな）ものはなんでしょうか。「持続可能な社会」の担い手として考えてみたいと思います。

□この単元プロジェクトについて

1　プロジェクト名：

「南高での学びをＳＤＧｓと結びつけよう」

2　ねらい

南高の授業での学びや部活動、特別活動などで取り組んできた活動の中から、自分が向き合ってきた物事が、社会的課題（ＳＤＧｓ）のどの目標にふれるものであるかを見いだすことによって、社会的諸課題と自分の生活の関係性を見いだしたり、学ぶことの有意味性を見いだしたりして、将来を担う世代の一員としてどのような現実的かつ持続可能なアプローチが可能かを探っていきます。

3　内容

①南高の生活で学んだことで、諸課題の解決に役立ちそうだなと思うものを、思いつくだけ思い出してカードに書き、グループ内で情報を共有する（まだゴールの番号は書かなくてもよい）。

②重複などを考慮しながら整理し、各グループに出たカードを話し合って１７のゴール別にまとめる。一つのカードでも分類の解釈が分かれることがあるので、必ず話し合って協議する。

③グループ別に①・②の内容を報告するポスターを作り、発表できる体制に整える。

ポスターは、ハーフサイズ模造紙１枚以上とする。数（たくさん）・質（勉強になる視点）ともに重視する。形式は自由だが、出されたカードは、可能な限りすべて分類し、ポスター上に貼り付けるなどして紹介することとする。協議した際に意見が分かれて議論になったものや、新しい視点となりそうなものは積極的に紹介できるようにする。

④ポスターセッション形式で発表する。５分ずつ（説明３分程度、評価２分程度）×班数のローテーションを組み、全員が各班の発表を聞き、評価・感想がかけるようにする（１人２回程度で説明役になる想定。各班は、何番目のパートでだれがプレゼンターとなるかを決めておく）。評価シートは、標準型（前回ＧＷのものと同一）とする。

4　授業の流れ（全４時間）

１時間目（きょう）

・ＳＤＧｓの説明と単元プロジェクトについての説明、グループ決定をします（この時間）。

・「3　内容」の①と②まで進めます。

２～３時間目

・班研究とポスター製作…模造紙とペン類は準備しますが、のりとはさみが各自必要です。

３～４時間目（講座によって時間が異なります。各先生の計画に基づいて進めます。）

・ポスターセッション　……　一人２～３回程度説明します。分担を決めておきましょう。

・相互評価　…観点に従い評価し合います。コメント欄には建設的な助言を書きましょう。

図１単元のはじめに生徒に配付したレジュメ（Ａ３サイズを縮小した）

・先行実践例を基にした計画立て

この授業は、山口県立響高等学校が取り組んだ「Hibiki SDGs Project」のうち、学校全体でどのような授業や活動が行われているのかをSDGsの17目標の視点で一覧表化した「カリマネボード～Hibiki SDGs Project Check!!～」の取組を４時間の授業の単元として取り入れたものである。

・授業の流れとその実際

授業では、はじめに３時間程度の班研究時間を設け、日常の学習活動とSDGsとの関連付けや発表形態の企画、準備等をさせた。地理Ａにおける班研究活動は２回目となり、グループで話し合いながら学習を深めていく方法についても徐々に要領を得てきたように感じられた（図２）。授業は２人で３講座を担当していたため、授業者同士で事前に打ち合わせたり、相互に相手の授業を参観し合ったりするなど、連携を強めつつ基本的には各授業者のオリジナリティを大切にしながら進めた。

図２　班研究（発表準備）段階のグループ活動のようす

続いて、残りの時間を使って各班がまとめた内容を発表し、相互に評価し合う活動をした。発表時間が１時間の講座では、簡易のポスターセッション形式を取って発表し、２時間で発表することができた講座では、各班が全体の前で発表するという形式をとった（図３）。班研究・発表活動は２回目となることから、今回は発表の内容や方法にも力を入れ、考察した内容を論理的に説明する力を身に付けることを特に重視させた。

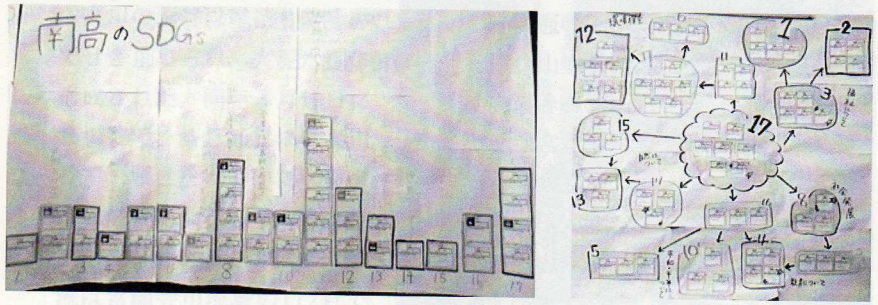
図３　作成したポスターの内容を発表するようす

・生徒の学習成果と振り返り

ポスターの作成方法は自由としたため、カードを17の番号別に分類して多少を比較したもの、ｘ軸方向にローカル／グローバルなスケールで分け、ｙ軸方向に取組の難易度で分けてマッピングしたもの、みんなに知って欲しいものとして優先順位を付けダイヤモンドランキングのような形で発表したもの、地図を描いてどこで発生している問題であるかをマッピングしたものなど、多様なものが作られた（図４）。

活動の最後の時間で、振り返りを書かせたところ、「たった１７に分類された目標なのに、それに関わる問題は数え切れないほどあって考えれば考えるほど出てきた。中には普通に過ごしても解決につながるものもあって驚いた」「世界の課題や解決策が日常生活の中で発見できると知り、何となく学んできたことが、実は世界の課題に取り組む土台だったということを感じた」などSDGsの視点を通して日常生活を捉え直すきっかけができていたことが伺えた。

図４生徒が班でまとめたポスター



（紙面の制約の関係で一部を切り抜いて掲載した）

４　さいごに

本実践は、単元レベルで生徒にSDGsの基本的な理解をさせる試みとして取り組んだ。学校全体で期間を定めて実施したものではないので、日常生活における実践レベルにまで落とし込めたものではないかもしれないが、比較的取り組みやすいと考えられ、またSDGs理解の第一歩としても効果があったのではないかと考えられる。実践に当たっては、教科担当者同士が相互に情報や考えを共有して連携し合えたことも、スムーズに授業に入れた要因の一つであったと考えられる。また、この実践と同時期に国語科でも小論文対策としてSDGsを取り上げており、複数の教科で取り上げることにより、生徒がSDGs学習を受け入れやすくなることを実感した。SDGs学習を充実させるためには、まずはSDGsに対する教職員間での理解の広がりと連携が重要であると言える。

なお、山口県立響高等学校における学校全体を通した実践の記録は、「SDGsを通したカリキュラムマネジメントの試み」として広島大学学術情報リポジトリに収録されているのでアクセスされご覧いただきたい。